ともに歩もう 石巻だより

伝えたい。過ぎ去った日々のあの笑顔を。
暗闇に立ちすくんだ時、
この記録が足元を照らす光となるように。
そしてまた明日の朝を迎えられるように。
朝日新聞社員がつづる。

子どもたち

あの日、帰らぬ旅に出た
子どもたちの記憶を刻みます

遠藤花さん［13歳］ 侃太くん［10歳］ 奏さん［8歳］

安らぎを、笑顔を

遠藤花さんが生まれたのは、両親がまだ東京に住んでいたころだ。

名前は、花の好きな母の綾子さんがつけた。女の子なら「花」と決めていた。父の伸一さんも気に入った。

石巻市渡波地区の生まれの伸一さんは高校を出てあてもなく東京へ。バブルの時代、アルバイトでも不自由はしなかった。

高田馬場のお好み焼き屋で店長をしていた時、そこを訪れたのが綾子さんだった。妹の友だちがその店で働いていたからだ。綾子さんも働きながら大学進学を考えつつ、実家で浪人中だった。二人とも二十歳前。人生の目標を定めかねていた。

入試のシステムが変わった年、綾子さんは東京の大学に合格する。それを機に、二人は将来のことを考え始めた。

綾子さん「何がしたいの？」

伸一さん「ものを作りたい」

どんな仕事があるのだろう。美術館や公園などいろんなものを二人で見て歩いた。東京郊外の昭和記念公園のウッドスペースを見たとき、伸一さんの心が動いた。人が安らげる場所を作れたら――。求人誌で木工会社を見つけ、応募した。綾子さんも就職し、二人は結婚。東京・下井草の小さなマンションで暮らし始めた。

花さんが3歳のとき、侃太くんが生まれた。名前は伸一さんがつけた。「侃々諤々」の「侃」には、強く正しいとの意味がある。

2年後、奏さんが誕生。名前は二人で悩んだ。花さんのように一文字で、いい名前は……。侃太くんの「か」、花さんの「な」をもらい、音色を奏でるような響きが二人とも気に入った。

40平米ほどの部屋に5人で暮らす。夜、子どもたちは「川の字」になり、足元に綾子さん、伸一さんは茶の間のテーブルをどかして布団を敷いた。

伸一さんは仕事の腕を磨いていた。あこがれだった昭和記念公園のウッドスペースの改修工事を手がけ、早くも夢をかなえた。綾子さんは、花さんと乳母車の侃太くんを連れて工事中の公園へ。二人とも大喜びだった。それからは工事が終わっても家族で何度も遊びに行った。

家の近くの公園のウッドスペースも作った。子どもたちがよく遊ぶ場所だ。「お父さんが作ったんだよ」。花さんは自慢そうに幼稚園で話していた。子どもが誇れる仕事をしている。それが喜びだった。↖

明日の風

東京都八王子市の上壱分方小学校は、都心の喧騒から離れた、自然豊かな土地にある。児童は約500人。佐藤千世校長と用務主事の荒川弘さんが迎えてくれた▼春先、学校を訪ねたのは、「花」を見せてもらうためだ。廊下に飾られた観葉植物、マザーリーフの茎の先に、薄緑と桃色の小さな提灯のように並び、清楚なつつましさをたたえている。葉の周りから芽を出して増える植物だが、鉢植えで花を咲かせるのはめずらしいという。丹精込めて育てた荒川さんは「12月につぼみを見たときはうれしくなりました」▼石巻市に住む紫桃隆洋さん、さよみさん夫妻から苗と葉をもらって育てたものだ。夫妻の次女、千聖さんは、東日本大震災の時、大川小学校の5年生。多くの級友とともに犠牲になった。震災の直前、さよみさんへの誕生日プレゼントに1枚のマザーリーフをくれた。「ママが育てて」の言葉とともに。震災後、新しい芽を次々に増やし、家にはたくさんの↖

平成27年5月発行（毎月1回発行） 第2巻4号（通巻8号）

結婚してまもなく、伸一さんの父が亡くなった。花さんの小学校入学に合わせて、母が一人で暮らす渡波に帰ることにした。

東京にないものを

伸一さんの実家は、マンションよりもずっと広い。「渡波にないものを数えるより東京にないものを楽しもう」。都会育ちの綾子さんはそう考えた。親戚も招いて夕食会にお泊まり会。東京から花さんの友だちが来たら、近くの海岸でバーベキュー。マンション暮らしではできなかったことだ。

下の階を気にしなくていいから、子どもたちは座敷で駆け回った。伸一さんは両親から「部屋で走るな」と言われたことはなかった。のびのびとはしゃぐ姿に、帰ってきてよかった、と二人は思った。

はじめのころ、花さんは泣きじゃくっていた。「学校で友だちの言葉が分からない」。ならば親はくよくよしていられない。綾子さんは地域の祭りや子ども会の行事にすべて参加し、奏さんが1年生の時、地域のお母さんとともに「読み聞かせサークル」をつくった。会は今も続いている。

伸一さんは東松島市で工房「木遊木（もくゆうぼく）」を設立する。始めたころ経営は苦しく、冬場は仕事もなくなる。そんなとき東京時代の会社から声がかかった。かつて仕事をしたアミューズメントパークでのメンテナンスに入ると、何カ月も家には帰れない。

3人の子どもから時折、手紙が届く。まだ字の書けない奏さんからは家族の絵。不在が長い父の姿は、紙の一番隅っこに半分になって……。「そろそろ帰った方がいいんじゃないか」。同僚から心配された。

伸一さんが不在のとき、綾子さんは子どもたちのことを描いた絵日記をつけていた。その中にこんな話があった。

「いやなことをされた時はどうするの？」と尋ねると3人の答えが違う。花さん「やめてって言う」、侃太くん「先生に言う」、奏さん「パンチとキックで」――。それぞれ性格が表れている。花さんは落ち着いてそつがなく、侃太くんはちょっぴり臆病。奏さんは向こう意気が強い。

渡波では、地元の漁師さんがカニなどを売りに来る。生きたカニが玄関に置いてあると侃太くんはおもしろそうに見ている。お湯が沸いて綾子さんが鍋に入れると、そうっと涙を拭いていた。

東京で入院していた曽祖母を子どもたちと見舞ったときのこと。笑顔で別れてエレベーターに乗った途端、奏さんがわっと泣き出した。一人で残すのはかわいそう、と。侃太くんが、奏さんに手を出した級友とのけんかに負けて帰ってきた時、伸一さんが厳しく叱りつけると、奏さんは泣きながら父を止めた。花さんは静かに「侃太は悪くないよ」。3人とも、命を思い、人を思う気持ちを育てていた。

いくつもの場面を

工房が軌道に乗るには何年もかかった。たまの休みの日、伸一さんは子どもたちとその友だちをトラックに乗せて遊びに連れて行った。侃太くんと奏さんは花さんの友だちから弟、妹のようにかわいがってもらった。

思春期の花さんはトラックに乗るのを恥ずかしがるようになる。だが、ある日、伸一さんが女川からの仕事帰り、トラックでコンビニの前を通りかかると、花さんと友だちがいる。自転車で来ていたのだが、雨に降られて帰れなくなっていた。「乗るか？」。荷台に自転車を積み込み、みんなを乗せた。カーブのたびに歓声が上がった。

いくつもの場面を今、思い出す。あの日の前夜も3人は川の字で寝た。

東日本大震災の時、伸一さんと綾子さんは仕事場にいた。3人がいた渡波は津波に襲われた。花さんと奏さんは家で、侃太くんは数日後に近くで見つかった。

伸一さんは工房を再開した。津波で犠牲になったアメリカ人の外国語指導助手、テイラー・アンダーソンさんの遺族が、職場だった学校などに書籍を寄贈するための本棚作りを2年以上かけて完成させた。「テイラー文庫」と名付けられている。子どもたちも習った先生だ。

多くの支援者が訪れた。みんなで力を合わせ、被災者自らの支援団体「チームわたほい」を設立した。名前は避難所だった「渡波保育所」からとった。

4年が過ぎて、綾子さんは子どもたちのことを話せるようになった。夫婦で楽しく思い出を語り合う。

人に安らぎと笑顔を――。若いとき目指した道を、子どもたちに支えられながら二人で歩んでいる。

鉢植えが並んだ▼学校の安全を願い、大川小を訪れた県外の学校の先生にリーフを手渡した。いつか日本中の学校に千聖さんのリーフを置いてもらい、子どもたちの命を考えてほしい――。それが二人の願いだ▼2012年暮れ、そのことを朝日新聞で紹介した。記事を読んだ荒川さんは「ぜひうちにも」。雪の降る日、石巻を訪ねた荒川さんは、大川小を案内され、驚いたという。小高い山がこんな近くにあるのに、なぜ……。「学校にいるから安全と思った」という言葉が心に残る▼事務室前に置かれたリーフのそばには大川小校舎の写真や資料が置かれ、だれでも見られるようにしている。学校だよりでも紹介した。この冬、花をつけた鉢植えのリーフを紫桃さんに見せるために再訪した。「嫁に行った娘が孫を連れてきたみたい」とさよみさんはいう▼災害から子どもたちの命を守るにはどうすればいいのか。三陸で起きたことを記憶として語り継ぐ試みは、遠く離れた地でも確かに続けられている。

発行人：小野智美（ono-s2@asahi.com）　川端俊一（kawabata-s1@asahi.com）　発行所：ASA 石巻中央（電話 0225－22－3669）

雄勝巡礼

石巻市雄勝町の港そばの雄勝病院の話から始めよう。

［第8回］

患者の手を握り穏やかに声をかけ

病院は、2車線の県道をはさんで、海と向き合っていた。

本館も新館も3階建てで最上階が病棟だった。

ベッドは40床。

2011年3月11日は満床だった。入院患者40人の平均年齢は84歳。

言葉を発せられない人もいた。動けない人も多かった。

あの時――。病院に残った職員28人のうち24人と、入院患者40人全員が犠牲になった。

のちに救助された職員4人のうち、2人は、その時、本館屋上で流された。男性事務職員と女性栄養士だ。

当時45歳だった事務職員の証言を記した前回に続き、当時22歳だった栄養士の証言を今回と次回の2回に分けて記す。

前回、事務職員をAさんと呼んだのにならい、ここでは栄養士をBさんと呼ぶ。

地震後の午後3時すぎ。気温は1度まで下がる。その日は公休日だったBさんが、車で病院に駆け付けた。コートは羽織らず、ワイシャツに薄手のカーディガン、スカート姿で車から降りると、本館玄関前へ。

彼女は、先輩の主任栄養士、佐々木弘江さん（当時42）は不在だと思い込み、厨房の調理員を心配して来たのだ。

「え、なんで来たの？」

佐々木さんが目を丸くした。

「大丈夫ですか？」

Bさんはまず先輩を案じる。

佐々木さんはいつもの明るい口調で「大丈夫、大丈夫」。

3階の窓から看護師の声が響く。「患者さん、大丈夫です」。玄関前の職員たちへ状況を伝えている。そのやりとりを耳にしながら、彼女は、調理員を探してきますと先輩に告げ、本館1階の厨房へ急いだ。

冷蔵庫が傾いていた。

誰もいない。

ガスの元栓はしめてあった。

2階へ駆け上がった。誰も調理員を見ていないという。

3階へ。皆、忙しく走り回っていた。

Bさんは調理員を探して病室を回る。

個室をのぞいた。看護師はいない。

お年寄りの患者がベッドに横になったまま、「あー、うー」と言葉にならない声を発していた。彼女は「大丈夫だから」と声をかけ、隣の部屋へ。

調理員はいない。1階へ駆け下り、玄関を出た。見つけた。

「大丈夫だった？」と問うと、調理員は「火も消したから大丈夫。中さ、入らい」。Bさんを伴って本館2階へ。そこで調理員は別の職員と話し始めた。

Bさんは、個室のお年寄りの患者を思い出した。

「私、3階へ行きます」

階段の窓から、浴槽の湯がザバーッとあふれるように、県道沿いの防潮堤を越えてくる津波が見えた。（これでは1階はだめだな）と思いながら3階へ。

大声が飛び交っていた。

薬剤部長の山田朗さん（当時57）とAさんの声だ。

「これは3階もだめだぞ」

「運べー、運べー。上まであげろー」

その言葉の意味をくみとることなく、Bさんはまっすぐに個室へ向かった。

聞こえてくる騒ぎに、ベッドのお年寄りは「なんや、なんや」と手を挙げている。彼女はその手を握り、穏やかに声をかけた。

「ちょっと地震が来ているだけだから。すぐおさまるから」

薬剤師鈴木一男さんも患者を抱え

背後で叫び声がした。

「なにしてるのっ」

Bさんは振り返った。

看護師（当時54）がいた。

「3階、もうだめだから。屋上にあがりなさい」

Bさんは驚いて問い返した。

「患者さん、どうするんですか」

看護師は声を出さぬまま、苦しげな表情で首を横に振った。

その表情は、今もBさんの脳裏に焼き付いている。

状況を察した。

患者はBさんの手を握って離さない。

彼女は言った。

「ちょっと待っててね。すぐ来るから」

患者の手が離れた。

廊下へ出た。

階段へ向かう。

階下から真っ白な水しぶきを上げながら、波が迫ってくる。

白い煙がたちのぼってくるようだった。

屋上出入り口の踊り場で、主任放射線技師の片倉満さん（当時41）が息をのむようにして、窓の外を凝視していた。

泣きながら屋上へ出た。

調理員が駆け寄ってきた。

屋上が視界に入る。

白いシーツにくるんだ患者を運ぶ人たちがいる。

（まだ間に合うのか。私も）

階段へ戻った。

見下ろすと、白衣の男性職員2人が、毛布にくるんだ患者を抱えてのぼってくる。枕側に1人、足元にもう1人。邪魔にならないよう壁際に身を寄せた。

「もう下には行けない」

※「石巻だより」のバックナンバーは羽鳥書店HP（www.hatorishoten.co.jp）で閲覧できます。

後ろ向きにのぼってきた先頭の男性が、彼女を横目にとらえ、強い口調で短く言い放った。

広い肩幅の白衣姿と眼鏡をかけたその横顔が、Bさんには薬剤部長の山田さんに思えた。

しかし、山田さんは当時、屋上でAさん、佐々木さん、歯科部長の須藤仲毅さん（当時49）とシーツにくるんだ患者を運んでいる最中だった。

今、思い返せば、主任薬剤師の鈴木一男さん（当時43）だったにちがいない。

鈴木さんは、東北薬科大学に在学中、バレー部の選手だった。肩幅は広い。向き合えば山田さんとは違う。背筋が伸び、厚い胸板に太い首が若々しい。ただ、額が広く、整えた短髪と眼鏡の一瞬の印象はよく似ている。

もう1人、患者の足元を抱えていた白衣の男性は、誰だったのだろう。

当時、本館にいた職員のうち、屋上にいた山田さんたちを除くと、残るのは、ただ1人。

臨床検査技師長の石井達也さん（当時58）だ。山田さんたちと1人目の患者を屋上へ運び上げた後、3階へ戻ったのだろう。すぐに行動できるよう、つねにスニーカーを履き、靴紐はしっかり結んでいた。この日も――。

Bさんは屋上へ出た。

涙が止まらない。

調理員が駆け寄ってきた。

泣き続ける彼女に「仕方ないから。大丈夫だから」と言葉をかける。

「えー」「わー」と戸惑う声が屋上に広がる。

患者そばに栄養士佐々木弘江さん

その中で聞き覚えのある声がした。

「患者さん、どうするー」

ハキハキとした高い声。先輩の主任栄養士、佐々木さんだ。

屋上の中央、緑色の十字の印をつけた給水塔の下にいた。

足元にはシーツにくるまれた患者がいる。その枕元に佐々木さんは腰をかがめていた。

身長145センチの小柄な佐々木さんが、私ひとりですぐに運ぶよという勢いで、大きな声を上げ、指示を待っていた。

だが、応える人はいない。

Bさんは、自分の目の前の、黒いリュックを背負ったお年寄りの女性に気づいた。

外来患者か、見舞客か。手を貸そうとした次の瞬間、足がすくわれ、水中に体が沈んだ。

もがくと、足がつき、水面に顔を出せた。胸までつかる水だ。

お年寄りの女性は見えない。

屋上の出入り口を囲む塔屋の周りに職員たちが集まっている。水をかきわけ、そこへ行く。職員たちが伸ばす手につかまる。

壁につけられたパイプにつかまり、塔屋の上へのぼった。ほかの職員たちを引き上げたい。

「手ー、手のばして、手ー」

何度叫んでも、頭が真っ白になっているのか、誰も動かない。

やっと看護師1人を引っ張り上げた。主任薬剤師の鈴木さんも、のぼってきた。

Bさんは海側に背を向けていた。看護師をもう1人引き上げようとした時、背中から波に押され、流された。次々に押し寄せる材木やタイヤにつかまる。

波間に、リュックを背負っていたお年寄りの女性が見えた。

（あ、のまれていないんだ）

ほっとした。

女川町議会　福島を視察⑧

私たちへアドバイスを「こうなる可能性ある」

女川町議会は2014年7月、震災後初めて福島県の福島第一原発事故の被災地を視察した。訪れたのは、原発が立つ双葉町と大熊町の隣、浪江町。震災時の人口は約2万人。今も全町避難中だ。

人影を失った住宅街を目に焼き付け、女川町議の阿部美紀子氏（63）は思った。「こういうふうに女川がなってはだめだ」

その後、浪江町の避難先、約50キロ内陸の二本松市へ。浪江町議らの説明を受けてから、女川町議らは質問を重ねる。

阿部氏も尋ねた。「原発を抱えています私たちへアドバイスをいただければ」

浪江町議長の小黒敬三氏（59）は「地域でいろいろ事情があると思うので、我々からどうこう言えませんが」と前置きして、言葉を短く継いだ。「『こうなる可能性はある』ということだけはね。現実に起きているのですから、そこは判断していただきたい」

原発を誘致した人も、反対した人も、ふるさとを離れねばならなかった現実。

阿部氏は考え続ける。事故の責任の所在はどこか。電力会社、国、県だろう。その責任をどのように取るのか。ふるさとはもう元に戻せないのだ。それならば、責任を果たすには、原子力政策を転換するしかない、と思う。

女川原発建設差し止め請求訴訟の原告団長・宗悦氏の長女である。1981年、父と夫と当時1歳の娘と10人の仲間と共に提訴に踏み切った。電力会社を相手にした原発訴訟としては全国初だった。地裁に高裁、最高裁でも敗訴した。だが、主張は今も揺るがない。

原発を失い、経済効果も失っていいのかと聞かれることもある。即答する。「経済より、命のほうが大事です」。復興した、事故が起きた、そして誰もいなくなった、そんな町になっていいのか、と問い返す。

「原発が出来る前、女川の人々は不幸だったでしょうか。そうではないですよね。原発の交付金で施設が出来ても、維持費がかさんで悪循環じゃないですか」

原発は必ず廃炉を迎える。ならば、今から始めたいと願う。今が絶好の機会。

女川は豊かな海と、山にも恵まれている。その自然を生かした産業はできないか。山々で生薬の原料を作れないか――。原発に頼らない町づくりを考えている。

協力：ASA 石巻中央、がんも大二、羽鳥書店、フロッグキングスタジオ